金子鷗亭　Ⅱ期　～俳句の書

俳句は季語をともなう５・７・５の17音で構成される日本固有の定型詩です。金子鷗亭は旅行や日課の散歩の際に、数多くの俳句を詠みました。1960年代から90年代までの30年間に詠んだ多種多様な自作句は、米寿の記念に刊行された歌句集『和顔愛語』（1993）にまとめられています。

鷗亭は自身の作品解説の中で、「俳句はほとんど短冊に書き、時に色紙に書いて鑑賞した。昭和29年第6回毎日書道展で『近代詩文書』という部門を独立してから、これらの慣習は破られ、小画箋紙全紙や連落のような大形用紙に短歌一首、俳句一句などを揮毫する形式が誕生し、今日では誰もこの形式に違和感を覚えたり、抵抗を覚えるようなことがなくなった」(※1)と述べています。本展では鷗亭が書いた自作句作品も展示します。

定型で詠まれた俳句の世界を、「近代詩文書」と出合った書家たちが紙の上でどのように表現したのか。金子鷗亭をはじめとする、書家たちが趣向をこらした作品を紹介します。

※1（社団)創玄書道会『創玄展30周年記念　金子鷗亭列品解説集成』1994年、 p.40

出品作品リスト　＊2 函館市蔵（当館寄託）、1，3-13当館蔵

No.	作家名	作品名	制作年	技法・材質	形状	寸法(縦×横、もしくは幅×奥行×高さcm)
1	金子　鷗亭	松尾芭蕉六句	1994(平成6)	墨・紙	屏風 (六曲一隻)	各 138.0　×　33.5
2	金子　鷗亭	山口誓子句　雙眼鏡	1970(昭和45)	墨・紙	額	89.0　×　59.0
3	金子　鷗亭	自作句　雙葉（秋風や）	1979(昭和54)	墨・紙	額	69.0　×　137.0
4	金子　鷗亭	自作句　天地ただ	1985(昭和60)	墨・紙	額	132.5　×　55.5
5	金子　聴松	草間時彦句　お寺まで	1984(昭和59)	墨・紙	額	132.5　×　102.5
6	石飛　博光	磯貝碧蹄館句　眺望	1984(昭和59)	墨・紙	額	61.1　×　165.7
7	加藤　秋霜	芥川龍之介句　朝焼けの	1985(昭和60)	墨・紙	額	126.0　×　96.1
8	千葉　軒岳	高浜虚子句「鶯」	1997(平成9)	墨・紙	額	70.4　×　138.2
9	駒井　鵞静	中村汀女句　遥かなるかな	1978(昭和53)	墨・紙	額	139.3　×　25.7
10	荒川　武夫	鷗亭題字「芭蕉句　閑さや」 虎渓山唐津風茶碗	1965(昭和40)	陶磁		14.5　×　14.5　×　8.5
11	荒川　武夫	鷗亭題字「芭蕉句　明月や」 虎渓山唐津風茶碗	1984(昭和59)	陶磁		14.0　×　14.0　×　8.0
12	荒川　武夫	鷗亭題字「芭蕉句　山路来て」 虎渓山唐津風茶碗	1984(昭和59)	陶磁		11.0　×　11.0　×　9.0
13	荒川　武夫	鷗亭題字「天賜清福」 虎渓山唐津風茶碗	不詳	陶磁		13.0　×　13.0　×　9.0